



小さな手

時任 心音

アイキャンという NPO 団体の施設を訪れた時のこと。仲良くなった、ストリートチルドレンの 8 歳位の女の子がいた。握ってくれる小さな手は温かくて、笑った時にできるエクボがとても愛らしかった。「日本ではどんな勉強ができるの?」「みんな学校に行けるんでしょう?」「学校は楽しいよ」彼らはそうして、学校でどんなことを勉強しているのか話してくれた。

それなのに、私はどうだろう。

「勉強したくないな」などと呟きながら、ただ置かれた状況で淡々と課題をこなすばかりで、自分がいかに恵まれた環境にいるのか、考えたこともなかった。羞恥で、汗が垂れた。

貧困。ミンダナオ島における内部紛争。研修前、フィリピンに関する資料を読み漁った私は、海の向こうにある研修先に対して「可哀想な国」そんな感想を抱いた。しかしその考えこそが、偏見であり、ある種の差別であったのだと、私は研修で気付かされる。

フィリピン研修を終えた今、鮮明に思い出すのは、折り紙をあげた際の、ストリートチルドレンの輝くような笑顔だ。彼らは過酷な環境の中、懸命に逞しく生きていた。しかし、目線を下に向けると、靴を履いていないからか、彼らの足は傷だらけで、爪は剥がれ、とても痛々しかった。

私達に出来ることは、海の向こうに住む彼らを「可哀想」と、憐憫の目を向けることではなく、子供達の大切な身体を守る靴を、温かいご飯を、そして彼らの笑顔を守り、自分たちの力で生きていけるように、質の高い教育を施すことだと、研修後、私は強く思った。研修後、私は同じ寮に住むフィリピン人の学生と、その他多国籍なメンバーと共に、フィリピンやミャンマーなどの、地方の子供達の学習をサポートするシステムを発足するため立ち上がった。このプロジェクトを始めたのは勿論、研修で見えた光景が原動力になっている。

百聞は一見にしかず。このような貴重な経験を提供して下さった JICA の皆様には、感謝の念に堪えない。あの 1 週間で感じた全てと、研修で出会ったかけがえのない 13 人の仲間を大切に、私はこれからも歩みを止めず、行動を起こし続けていきたい。